

研究論文

近代オリンピックの理念から新たな哲学へ¹

関 根 正 美（スポーツ哲学研究室）²

Abstract

The criticism of 'Eurocentrism' has been levelled at the Olympics and Olympism. The principle of Olympism does not have universal validity, but it should be revised depending on the social change of the times. Thus we can pose this question: What is the modern character of Olympism? The purpose of this paper is to clarify the interpretation of Olympism. The following methods are adopted to meet the purpose: the Olympics philosophy of Hans Lenk, the philosopher who used gold medal as a framework for interpretation, is introduced. The following factors discussed are as follows: (1) The main points of Olympism, which give a suggestion of the modern Olympics idea, its achievement value, the mythological interpretation of the athlete as well as the Olympiad; (2) The conception of the human being in Olympism is shown to be based on Western values, which is a limitation of the original Olympism. (3) The motto that Lenk proposed for the Olympics, 'faster, higher, stronger, more beautiful, and more human,' created the possibility of making Olympism universal. The following conclusions were drawn to aid our interpretation of Olympism: (1) The values of the modern Olympics were arrived at by combining Coubertin's Olympic idea with the motto 'more human, more beautifully.' (2) It's value is realized by the festival's combination of top-level sports and encouraging lifelong sports participation. (3) The new modern Olympism has developed from the myth of the athlete to the creation of a way of life. The myth of the athlete encourages human beings to create their vivid life.

（受理日：2016年3月4日）

Keywords: Olympism, Hans Lenk, legacy, Western value, 'more beautiful, more human'

キーワード：オリンピズム，ハンス・レンク，レガシー，西洋的価値，「より美しく，より人間的に」

¹ The new modern Olympism based on the Coubertin's Olympic idea

² Sekine Masami, Sport Philosophy

1. 問題の所在

オリンピックがすべてのスポーツ人の夢であると言われることは奇妙なことである。ましてや、すべての競技者はオリンピックを目指すというのも誤りである。なぜならJ.パリーが述べるように、「オリンピック種目のスポーツのほとんどは、19世紀末の植民地時代に西ヨーロッパで作り上げられたものである」¹⁾からである。オリンピックにはない種目が存在し、それらに賭けている競技者が現実存在する。にもかかわらず、オリンピックがスポーツの世界だけでなく、社会一般においても特別な地位を保っているのはなぜなのか。

たとえば、オリンピックの現象は、次のように特徴づけられる。最高レベルの競技、莫大な公的資金、多数のボランティア・無償の奉仕、商業資本、世界中からの観客など。競技レベルが最高のものであったとしても、競技レベルのみがオリンピックを特徴づけるわけではない。オリンピックは単なるスポーツの世界一決定戦ではないのであって、オリンピック哲学も「スポーツの観点からだけではなく、現代のグローバル化された文化を背景とした知的な思考によって考えられなければならない」²⁾のである。オリンピックという現象は複雑であり、スポーツの観点からだけで解明できる現象ではない。

近代オリンピックを古代のそれにならって再興したクーベルタンが、教育を射程に入れて近代オリンピックの復興を図ったことはよく知られている³⁾。確かに近代オリンピックは教育的価値を重要な要素としている。だが、現代のオリンピックに見られる商業主義や政治的利用、ドーピング問題などの現実、教育的価値から遠く離れた地点に達していると言えるであろう。オリンピックの現状と理念の不一致という現実がある一方で、両者を調和させる要請がある。両者の間で、ある種の緊張が生まれている。ここに人間的、教育的価値から離れつつあるオリンピックの現実に対して知的思考を展開する必要が生まれる。その際に、

鍵となるのがオリंपイズムと呼ばれる理念である。

哲学者による近年のオリंपイズムの定義と理解は次のようになされている。「オリंपイズムとは、社会的な哲学であり、世界の発展、国際理解、平和に共存することであり、社会や倫理教育においてスポーツの役割を強調するものである。クーベルタンは、スポーツがルールを遵守する身体活動として『普遍的なもの』であり、文化横断的に触れ合うことができるものであることを理解していた」⁴⁾。近代オリンピックがクーベルタンによって始められた歴史的事実は、オリंपイズムという理念もまたクーベルタンに由来することを意味する。クーベルタンが19世紀後半のイギリス教育に感化を受けてオリンピックを着想した事実は、オリंपイズムが当時の時代状況や社会的背景に影響を受けている点を類推させる。古代ギリシアで生まれたプラトンのイデア論が、地中海という地理的条件ならびに自然の影響を背景に持っている指摘される点にならえば⁵⁾、クーベルタンに源泉をもつオリンピックの理念にも、イギリス帝国主義時代の島国という背景を読み取ることは可能であろう。実際に、オリンピックならびにオリंपイズムに関しては、「ユーロセントリズム」という批判がなされてきた。ここからも、オリंपイズムが決して完全無欠の普遍妥当性を有する原理ではなく、時代や社会的変化に応じて修正されるべき性格が浮き彫りになる。

ここで生ずる疑問は、J.パリーがオリंपイズムを普遍的な社会哲学であると解釈する一方で、ではオリंपイズムの現代的性格は何かという点である。本稿ではオリंपイズム解釈のための方法として、ハンス・レンク⁶⁾のオリンピック哲学を補助線として導入する。レンクは1960年のローマオリンピックにおいてボートのエイトで金メダルを獲得している。さらに哲学者としてオリンピックを哲学の対象にしている。オリंपイズムを解釈するにあたって、競技者と哲学者の重層的視野から紡ぎ出されたレンク概念を用いることで、オリ

ンピズムの新たな可能性に迫れるものと思われる。レンクはクーベルタンのオリンピック哲学をどのように解釈しているのか。そしてそこからどのような哲学を引き出しているのか。以上のことを論じたうえで、本稿ではオリンピックの理念という位置づけのオリンピズムを批判的に解釈し、そのうえで著者の立場からの時代に応じた解釈可能性を明らかにしたい。

2. オリンピズムとは何かという問題

オリンピズムを考えるときに直面する困難さは、唯一の確固とした普遍的なオリンピズムというものが存在しない点である。この点に関して、近年でもなお次のように指摘されている。「オリンピックムーブメントと結びついた哲学は、一般に『オリンピズム』と言われている。しかしそれは厳密にオリンピズムとは何かという明確さとは程遠いし、何に由来しているかも不明確で、どこを目指しているかもわからない」⁷⁾。一般にオリンピズムと呼ばれているオリンピック理念は、不変の明白に定義できる基本理念はなく、多義的である。これまで様々な立場から、時代に応じて考えられてきた。

ここで基本的な事項を確認しておく、IOCの「オリンピック憲章」では、オリンピズムの根本原則として次のように書かれている。

1. オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探究するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。

2. オリンピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会を奨励することを目指す

し、スポーツを人類の調和の取れた発展に役立てることにある。(JOC ウェブサイト 2015 年版日本語訳からの引用)

これは現代的な価値を付与したオリンピズムである。

以上のようなオリンピズムの現代的定義に先立つこと 80 年前、クーベルタンは「近代オリンピックの哲学的原理 (Die philosophischen Grundlagen des modernen Olympismus)」を提起している。これは 1936 年にベルリンオリンピックが開かれる 1 年前の 1935 年にドイツで行ったラジオ演説とされており、クーベルタンの「オリンピックの回想」というテキストの中に入れられている⁸⁾。ここでクーベルタンはオリンピズムの特徴について自ら具体的に語っている。第一は「宗教性 (eine Religion)」であり、第二は「高貴さと純粋さ (Adel und Auslese)」であり、第三は「城内平和 (Burgfriedens)」である。さらにクーベルタンは後半部分で「人間の春 (der menschliche Frühling)」ということを強調している。彼は次のように述べている。「オリンピック競技は宇宙の厳格さに基づくリズムに則って催されねばならない。というのも、オリンピックは人類の絶え間ない進歩を記念して行われる人間の春の四カ年祭を表現しているからである」⁹⁾。クーベルタンは最後にオリンピック競技の要素として、「芸術と精神が競技に加わることによる美 (die Schönheit durch die Beteiligung der Kunst und des Geistes an den Spielen)」を挙げている¹⁰⁾。

以上のクーベルタンによるオリンピックの哲学的基礎としてのオリンピズムは、IOC が表明する現代のオリンピズムに対して古典的な位置を占めている。この古典的なオリンピズムと現代的なそれが出会うところに、どのようなオリンピズムの解釈が生じ、現代のオリンピック理念に示唆を与えることができるのか。この問題に対して、以下でレンクの解釈を加えながら迫ってみたい。

3. レンクの考えるオリンピズム

3.1 中心価値としての達成価値

レンクの立場は、クーベルタンの考えるオリンピズムを最大限尊重しながら時代に応じたものに変えてゆくというところにある。この考え方は、2006年に発表されたDecostaの論文“Never ending story”¹¹⁾に引き継がれている。オリンピズムが時代性ないし可変性という性格を有している一方で、オリンピックの自己同一性を担保する役割を担う核に相当する中心的価値は何であろうか。

先行研究では、レンクのオリンピック哲学において「達成価値」がオリンピックの中心的価値とされている点が明らかにされている¹²⁾。クーベルタンがオリンピックを構想した根本動機である「教育」でさえも、レンクはそれが達成価値からもたらされるのだと考え、達成価値をオリンピック理念の中心価値と考えている。たとえば、彼は次のように述べる。「競争，エリート競技者，機会均等，形式的フェアネス（ルールを堅守する規範）の普及などは，達成価値と結びつくことで確固たるものになり，明白になる」¹³⁾。このようなレンクの考えに対し、田原は次のように述べている。「レンクはそのオリンピック・ソーシャル・システムの存続におけるオリンピズムの基本的要素の中で，その重心の役割を持つものが、『達成価値』であるとの見解を明らかにしている¹⁴⁾」。

オリンピックの諸価値が達成価値と結びつくということは，一見すると奇妙である。クーベルタンの近代オリンピック再興の動機からすれば，教育価値が中心に位置づくというのが一般的考えであろう。だが，田原がオリンピズムの価値体系は，「『達成価値』を重心に置き，『倫理的価値』『全地球的価値』等の価値をふまえ，最終目的である『完全な人間の創造』という『教育的価値』に到らしめるものであると考えられる」¹⁵⁾と指摘するように，オリンピズムの諸価値の構造的中心に達成価値が存在し，最終的に教育的価値が実現する構造

が見て取れる。レンクは，達成価値が他のオリンピック価値を一つの輪につなぎ，そのシステムの中で構造的に決定的な位置を占めるのだと考える。

達成価値を実現する現実の存在が競技者である。オリンピックを目指し出場し，さらにはメダルを取るような競技者は，いわばエリートの競技者である。次になぜ，エリートの競技者はオリンピックの価値を教育されるべきなのか？について考えてみたい。

3.2 競技者の神話的解釈

レンクはオリンピックを目指す日々の中で，スポーツ選手に対する偏見や差別のような不快な経験をした。レンクは，競技者が特に新左翼の社会批判者たちから「筋肉マシン」や「メダル製造ロボット」と言われるのに我慢できなかった¹⁶⁾。単なる「筋肉マシン」でもなく「メダル製造ロボット」でもない競技者とはどのような存在なのか。

レンクは競技者を神話的に解釈する。具体的には，ギリシャ神話に出てくるヘラクレスとプロメテウスに競技者をなぞらえて競技者を解釈する。彼は次のように述べる。

競技者は，いわば神話の存在であるヘラクレスとプロメテウスの中間に位置している。（ヘラクレスはスポーツの半神像であり，彼の任務は競技における様々な英雄行為であった。彼は古代のオリンピック競技祭を興したとされている。プロメテウスは人間に文化，技術，進歩への努力をもたらしした）。いわばスポーツは神話的な機能を持ち，ヘラクレスとプロメテウスの世俗化された神話として解釈できる¹⁷⁾。

ヘラクレスは強さの象徴である。「強さ」という点で，競技とヘラクレスの結びつきは容易に想像できると思われる。クーベルタンの思考の中でも，ヘラクレスは重要視されていた。レンクは次のよ

うに指摘している。「オリンピック大会にとって記録とパフォーマンスの向上は重要な基本要素の一つである。クーベルタンは正々堂々と戦うことや自己完成の価値を主張したが、彼にとってそれらはオリンピックのみならず人生にとっても重要な教育目的の一つであった。というのも、クーベルタンはヘラクレス信奉者であり、競争の形而上学者であったからだ」¹⁸⁾。プロメテウスは技術を盗んで人間に与えたところから知の象徴と言われる。ヘラクレスとプロメテウスを登場させることで、レンクはスポーツの競技者を、強さと知を兼ね備えたある種の英雄になぞらえて解釈している。

このように、レンクが考える競技者の人間像は強さと知性を兼ね備えた英雄であり、ある意味で調和のとれた人間である。この場合の知性とは、単に知識があるという短絡的な意味ではない。創造性や物事をやりぬく忍耐力などの総合的な精神性を意味している。レンク自身は、このような競技者の事例として、たとえば、1960年代に走り高跳びの背面跳びを編み出したフォスベリーと、モンテリオールオリンピックでけがをしながらも月面宙返りを成功させた体操日本の藤本選手の例を挙げている¹⁹⁾。

もちろん、プロの選手にも強さと知性を兼ね備えた選手は多くいるだろうし、人々のあこがれの的になっている選手もいる。しかし、オリンピック・ムーブメントの観点からみればお金を稼げる選手という模範像によってでもなく、あるいは注目される人気選手という模範像によってでもなく、オリンピックを目指し、4年に一度のチャンスを最高のパフォーマンスを成し遂げたという模範像によって青少年に影響を及ぼすことが重要であると思われる。年俸や契約金が何百万ドルとか日本円にして20億とか、テレビなどのメディアで活躍するアイドルとしての模範像ではなく、どこまで自分を高めることができるのかに挑戦し、それを知性と体力の両面から追求する人間像を提示することが競技者という模範像の内実である。

これが、スポーツを通して青少年の目指す人間像になると思われる。

競技者は、教育が足りないからオリンピックの理念を教育されるべきなのではない。競技者は神話的なあこがれの対象であり得るがゆえに、オリンピックの理念を教育される必要が生まれるといえる。とりわけオリンピックの理念に照らし合わせれば、競技者は青少年をオリンピック精神に導く存在であり、一つの理想的な人間像を見せることができると言えるだろう。このように、競技者の達成を神話的に解釈し、現実社会にそれを反映させることが、商業的価値を第一とするプロフェッショナルスポーツとオリンピックの違いではないかと思われる。

次に3番目の論点として、そのような競技者にとって、そしてまた我々にとって、オリンピックの大きな特徴であり、オリンピズムの哲学的原理としてクーベルタンが挙げている「オリンピアド」について考えてみたい。考えてみれば、4年に1度ということが哲学的原理に含まれているというのも奇妙なことなのである。

3.3 オリンピアド—結果思考への批判

オリンピアドについて、レンクは次のように述べる。「自己の達成によるオリンピックのエリートとは、達成への動機と意志が試合の時のみならず、大会のための準備期間においてさえも持続させたが故に讃えられる存在である」²⁰⁾。大会のための準備期間は、とりもおさずオリンピアドを意味している。

では、オリンピアドの4年間が意味するものは何か。レンクの言葉からは、それは単にメダルを目指すだけの年月ではないと言えるのではない。この4年間こそがオリンピズムで言われている「スポーツを通して心身を向上させ」「肉体と意志と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指す」ための4年間だといえる。オリンピアドの4年間は、メダルへの「準備期間」ととどまらず、オリンピズムを競

技者の存在に実現させることのできる「本番」なのである。その意味で、競技者の側からすれば、オリンピズムの実現は4年間の過ごし方にかかっているし、4年間でどのように競技者が過ごしたかを問うていえる。

4年間の意味を問いかけるオリンピアドの考え方は、競技者ではない我々に対しても課題を投げかける。われわれもまた、オリンピアドの4年間で試されているといえる。とくにメディアに顕著に見られる傾向だが、メダルの数や色だけに注目し価値を認める態度は慎んで行かなくてはならないであろう。なぜなら、競技者が4年間で達成の時間として挫折の経験も含めて過ごす時間を、メディアは冷静に伝える役割を担っているといえるからである。それを受け取る側の人間であるわれわれもまた、競技者の成し遂げようとする、成し遂げることを知的に解釈できるようになることが必要なのである。そうやって初めて、競技者は過度な露出や批判というタレントにつきものの人権さえも脅かされる状況から救われる。そのためのオリンピック教育も、関係者に対して必要ではないだろうか。東京オリンピックまでの4年間で解釈し、競技者の神話的解释を可能にするためには、大会を1年後に控えたころに行っては遅いといわざるをえない。前の大会が終了した後、次のオリンピックを目指す選手たちの動向について、選手の人権に配慮しながら記録を残し人々に可能な範囲で随時報道していくことが、競技者の姿を神話的に解釈するためには必要なのである。

いずれにせよ、オリンピアドの新たな解釈の可能性は、結果思考、メダル獲得至上主義への反省を含むのである。

4. オリンピズムの人間学：西洋的人間像の限界

これまでの考察からの印象では、オリンピズムは人間や社会にとって理想的なものと思える。人

間教育の面でいえば、それは達成を通して調和的な人間を育成することにあるといえる。つまり、オリンピズムは調和を保ちながら何事かを成し遂げる人間の育成を目指している。古代から近代に引き継がれたオリンピックの歴史からすると、オリンピックにみられる人間像が西洋的な価値に基づくものであることは言うまでもない。オリンピックはヨーロッパの価値を修正しながら、それを普遍的な価値としてきたのである。この点について、レンクは次のように言う。

このヘレニズム偏愛の考えに対してゲルシュテンベルクはかつて次のような批判を加えた。すなわち、オリンピアは西洋諸国による西洋文明特有の理念であるにすぎず、異なる文化背景を持つ人々に対して違和感を与えざるをえないと。この批判は、もしクーベルタンが古代オリンピックにかなる修正も加えず、しかもより一般的で形式的、機能的価値をまったく無視していたのであれば正当性をもつであろう。だが、クーベルタンは意図的にそして明かに汎ヘレニズムの理念を真の国際的な現象へと作り換えたのである。彼は近代オリンピックの最も重要な原理の一つを「すべての大会、すべての国々」と表現した。したがって、近代オリンピックは近代に応じた理念に基礎を置いている。古代オリンピックの原理のみを保持するのでは、西洋の文明圏においてですら理解を得ることは困難であるし配慮が足りないであろう²¹⁾。

このようにレンクは、近代オリンピック理念の普遍性を認めている。オリンピズムやオリンピックの理念なるものは、クーベルタン自身が古代ギリシアの考えを修正しながら普遍的な価値を持つようにしたのである。

しかしながら、オリンピズムは伝統的な西洋的価値を引き継いだことで、本当にその目的を果たすことができるのだろうか。レンク自身、オリンピックの価値システムに懐疑的な部分もある。たとえば、レンクは1979年の著書の中で次のよう

に述べている。

価値の普遍性はムーブメントが継続することを助長し、目的を堅持することに力を貸したのである。このいくぶんか西洋の個人主義、達成志向、進歩への志向、機能的かつ集団的価値の意味合いを帯びたオリンピックの価値システムは、一つの全体として、地球が文化の統合体となっていく中でいかに現代社会の現実に向き合うことができるのだろうか²²⁾。

クーベルタンは1935年の前出のラジオ演説における第二の特徴を述べる文脈で、近代オリンピックの最も有名なモットーに言及している。「競技を拘束し抑制しようとする考えは夢に過ぎない。競技に帰依する者は抑制なき自由を求めている。それでここに一つの標語ができる。すなわち、“Citius, Altius, Fortius”『より速く、より高く、より強く』である。これは、記録を破ろうとするすべての人へのモットーである」²³⁾。このモットーは現在のところ、「オリンピック憲章」第1章オリンピック・ムーブメント第10条(Olympic Charter, Chapter1: The Olympic Movement, 10:The Olympic motto)で次のように規定されている。「オリンピックのモットーである『より速く、より高く、より強く』はオリンピック・ムーブメントの大志を表現している(The Olympic motto “Citius — Altius — Fortius” expresses the aspirations of the Olympic Movement)」(オリンピック憲章, 2015年版, JOC ウェブサイトより引用)。オリンピックをはじめとする競技スポーツは勝利の獲得ないし記録の向上を目的とする。それゆえ、このようなモットーは競技者にとって魅力的である。競技者の卓越に向けての絶え間ない努力を導き、表現するための原理として、このモットーは現代でもなお大きな影響力を持っているといえる。けれども、勝利や記録が商業的価値を持つようになり、さらにはドーピング違反の増加を目の当たりにすると、このモットーの限界

が現れてくる。レンクはこの点を次のように指摘する。

最も有名なオリンピックのスローガン「Citius, Altius, Fortius」は「pulchrius (より美しく)」「fumanus (より人間的に)」というオリンピック・ムーブメントの美的で人道主義的なねらいを表現する言葉によって補完されることが可能であるし、そうされねばならない。実際にオリンピックの哲学は、スポーツの観点からだけではなく現代のグローバル化された文化を背景とする最新の議論に基づく知的水準に従ってなされなければならない²⁴⁾。

オリンピック種目に採用されている近代スポーツは、この「より速く、より高く、より強く」を基本的価値として発展してきた。近代オリンピックの普遍性として信じられてきたこの価値が限界点にあるとするならば、何らかの形で修正が施されなければならない。元の価値に対して、全体を変形するのか追加要素を施すのかが図られなければならない。レンクは「より美しく」「より人間的に」を加える方向を選択した。その意図はこうである。

オリンピックムーブメントは今日危機的な状況にあってもなお、その高貴な伝統に応えるために人間的、教育的、哲学的な理念を意識し続け、意識的に追求しなければならない。オリンピックムーブメントは非常に重要な人間的理念なのであって、商業主義、テレクラシー²⁵⁾、そして愛国心などの無法地帯の中で犠牲にされてはならないし、政治やスポーツ役員や管理者の近視眼的で現実に向う方向付けと操作に身を委ねるだけであってはならない。これはオリンピックムーブメントの非スポーツ的な構成要素、原理および方針、すなわちそれらはオリンピックの人道的、人間学的、哲学的基礎と同じような価値システムにとって、一層重要である²⁶⁾。

オリンピックでメダルを獲得することは、特に競技者個人にとって確かに重要なことである。これは否定できない。オリンピズムの達成価値に照らし合わせてみれば、メダル獲得を目指すことは競技者にとって最も重要であるともいえる。だが、それがオリンピックにとって唯一の価値でもないことは、先にオリンピズムの神話価値およびオリンピックアードに関する考察から明らかになる。クーベルタンは実際に、「人生で最も重要なことは、勝つことではなく闘うことである。本質的には『勝ったこと』ではなく、よく戦ったことが重要なのだ」²⁷⁾ という有名な言葉を残している。オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」と、「勝ったことではなく、よく戦ったことが重要なのだ」という思想はクーベルタンの中で矛盾しなかったのだろうか。「より速く、より高く、より強く」の思想は古代ギリシアにおけるホメロスの人間像に源流をもつ²⁸⁾ ことは、既にレンクによって指摘されている²⁹⁾。そして彼は、ギリシア的人間像は、オリンピック理念のための人間観として万能ではないとしている。すなわち、「我々は——それは今なおわれわれがしばしば犯してしまう誤りであるが——古代ギリシア人のように勝利や唯一無二の勝者、唯一の勝者への行き過ぎた方向付けを誇張してはならない」³⁰⁾ との考えを提起する。このようにして、レンクは「より速く、より高く、より強く」のモットーが現代オリンピックに採用される際の限界を指摘し、新たなオリンピック哲学のためのモットー「より美しく」「より人間的に」を補完する構想を立てたのである。ここに、達成価値と人間学的価値の調停が、レンクの構想によって図られたとみるべきであろう。

次に、これまでの考察からオリンピック哲学の一つの応用を企ててみたい。

5. オリンピック哲学とオリンピックレガシー

オリンピック哲学の実践的場面として、2020年東京オリンピックのレガシーに言及しておきたい。オリンピックのレガシーは先行研究によれば、「有形のレガシー」と「無形のレガシー」がある³¹⁾とされ、「無形のレガシー」の重要性が指摘されている³¹⁾。

レンクは、「より速く」「より高く」「より強く」「より美しく」「より人間的に」ということを提唱した。これは達成価値に人間的な価値を加えたものである。これはどのようにレガシーとして実現可能なのだろうか。ここでもクーベルタンに戻ってみよう。

クーベルタンの考えたオリンピズムの哲学的原理の一つである「人間の春」、すなわち、「オリンピック競技は若々しい成人を祝福するためにおこなわれなければならない」³²⁾ という考えは、現代を生きるわれわれにとってどのようにうけとめれば良いのだろうか。この「人間の春」を生物学的に解釈するのではなく、人間の精神の問題として、とりわけレンクが言うような「達成」「自分で何かを成し遂げる」という面から解釈できるのではないだろうか。これが、レンクの考える「達成価値」なのである³³⁾。

現実には、たとえ、生物学的に18歳から20歳の人であっても「人間の春」ではなく「人間の秋、晩秋」のような人生を送っている人もいるであろう。レンクも指摘しているが³⁴⁾、技術の進歩によって受け身であることが日常生活で余儀なくされている。(若者のスマホ、パソコン、ちょっと古いところでは、カウチポテト族などが思い浮かぶ)。また、ある統計では他の国々よりも日本の若者が未来に対して悲観的であるとか、他の国の若者よりも希望を持っていないなどの指摘もなされている³⁵⁾。東京オリンピックのレガシーは、オリンピズムを頭で理解するのではなく、人々の生活スタイルをスポーツ的なものに変え、能動的な精神性

を助長するところに実現されるのではないかと考える。それはすべての人々を創造的な生き方へと導くものであり、「人間の春」の到来を予感させるレガシーである。現世的な拝金主義を超えて、未来への希望を紡ぐという意味で、このレガシーをここで、「幸福的レガシー」と規定しておきたい。

能動的な精神とライフスタイルを創造することは、人生において「よく戦う」ことに他ならない。「よく戦う」という点をオリンピック競技で考えるとき、「よく」とは何を意味するのかが、さらに問われるべきであろう。オリンピック競技を規定する「よさ」が、「より速く、より高く、より強く」だけであるならば、ドーピングや商業主義などの現代オリンピックの病理は深まる可能性がある。病理改善のためには、「より美しく」「より人間的に」というモットーがオリンピズムの観点から重要になってくる。この人道的、人間学的価値は「福祉的レガシー」あるいは「ユニバーサルレガシー」として、スポーツ文化の創造に寄与するものと考えられる。スポーツは闘争ではなく代理戦争でもない。また群衆の興奮欲求を満たすためのアルコールの代償でもない。齋藤は次のように述べている。

レスリング、ボクシングのような格闘競技も、それぞれ厳格な規則によっておこなわれ、相手を傷ける争闘行為はすべて禁じられている。つまり競技とは技を競うことであって、相手を倒す争闘ではないのである。しかも競技は、自由意思によってルールを承認し、相手を承認したうえでおこなわれるのだから、これは争闘とは本質的に異なる。それは条件づけられた争闘ではなく、友情と平和とを基盤に置いた競争なのである³⁶⁾。

スポーツの競争が友情と平和を基礎に置いているかぎりにおいて、それが生み出すものは破壊的な勝利でも憎しみでもないはずである。それは人間学的価値を持つものであって、オリンピックはその人間学的価値が実践される場なのである。

結語

以上、考察を進めてきたことは、とりもなおさず、「オリンピック憲章」で述べられている「生き方の創造」というオリンピズムを実現してゆく道になると思われる。その途上で、競技者は人々を勇気づける「神話的存在」として解釈され、模範像とされるべきである。競技者が国家や競技団体、メディアに利用されるのであれば、オリンピックの哲学はレガシー創造の途上で、それらに対して反省的思考を迫る批判的態度を持たなければならない。

また、レンクの主張するオリンピックの達成価値の実現は、人々の幸福と結びついた形で「より人間的に」実現可能となる。クーベルタンがオリンピックに託した理想は、レンクの哲学が加味された「より速く、より高く、より強く、より美しく、より人間的に」へと展開されることで、現代のオリンピックの価値を高めることになるであろう。それはトップレベルのスポーツの祭典と市民の生涯スポーツを結びつける形で実現される。現代の新たなオリンピズムは、競技者の神話から生き方の創造へとつながってゆくのである。それはシステム化された世界における受動的な生から能動的な生の創造への転換である。この意味でオリンピックはアルコール摂取の代償行為ではなく、攻撃本能や抑圧気分の補償行為でもなく、人間の能動性と創造性を起動させる役割を担っている。

注および文献

- 1) パリー, J.・ギリギノフ, V.: 舛本直文訳 (2008) オリンピックのすべて——古代の理想から現代の諸問題まで。大修館書店：東京, p.247.
- 2) ハンス・レンク：畑孝幸・関根正美訳 (2006) オリンピック競技者の人間学——オリンピック大会と競技者のための現代哲学に向けて——。体育・スポーツ哲学研究. 28 (2) : 119-134.

- 3) この点については研究書の範囲を超えて、現在では体育学の教科書レベルでも確認できる共通理解事項となっている。
- 4) パリー, J.: 舛本直文訳 (2008) 前掲書, p.17.
- 5) 大橋良介はプラトンのイデア論に見られる「美の経験」について次のように述べている。「ところで、このようなプラトンの美の経験は、ギリシア的世界を背景にしていると言わねばならない。それはどこまでも、明澄な風向のなかで遠方の山々や島々を見渡せる地中海の、すぐれて視覚的で理性的な世界の、最高にして最深の経験だった。それだけに、美的イデアの経験は、深い森林に覆われて神秘の世界と交わるゲルマン世界や、砂嵐に見舞われる中で超越神を信じる中近東的な砂漠世界、あるいは四季の変遷を知らずに常夏に暮らす茫洋たるインド的世界、いくつもの大河と大草原とを抱えつつ諸民族が中原の覇権をめざして争ってきた中国的世界、そして春夏秋冬の季節の風光のなかで八百万の神々を奉じてきた極東の日本的世界、そういった諸世界での「美」と「実存」の経験とは、自ずから異なっている。これらの諸世界においても、人間であるかぎりの「生まれて死ぬ」という原体験のレベルは、どこまでも通底するであろう。しかしながら、「どのように生まれて、どのように死ぬか」という風土的・歴史的体験のレベルでは、差異と隔絶が生じる」。大橋良介 (2010) 「第五の狂」としての美的実存。実存思想協会編『実存の美学』。実存思想論集XXV (第二期第十七号)。以文社：東京, p.8.
- 6) Hans Lenk (1935-) はドイツのカールスルーエ大学哲学名誉教授。哲学および社会学の博士号と教授資格 (Habilitation) をそれぞれ持ち、ドイツ哲学会、世界哲学者アカデミーの会長などを務めた「金メダリストの哲学者」である。ちなみに、1989年9月22日に日本体育大学で「A Pragmatic Approach of Ethics and a Typology of Responsibilities in Sport」と題した日本講演を行っている。レンク博士の詳細な情報については次の文献を参照されたい。
関根正美 (1999) スポーツの哲学的研究：ハンス・レンクの達成思想。不昧堂出版：東京.
- 7) Reid, H. L. (2015) Olympism – A Philosophy of Sport? McNamee, M. Morgan, W. J. (Ed.) Routledge Handbook of the Philosophy of Sport. Routledge: London. pp.368-382.
- 8) De クーベルタン, P.: カール・ディーム編：大島鎌吉訳 (1962) オリンピックの回想。ベースボール・マガジン社：東京. pp.201-207.
- 9) De Coubertin, P. Olympische Erinnerungen. Diem, C. (Hg.) (1959) Wilhelm Limpert-Verlag: Frankfurt am Main, 1959, S.220. なお、訳出に当たっては、大島訳を参照した。
- 10) Ibid. S.222.
- 11) DaCosta, L. (2006) A Never-Ending Story: The Philosophical Controversy Over Olympism. Journal of the Philosophy of Sport. 33: 157-173.
- 12) この点に関する先行研究としては、すでにオリンピック研究者の田原淳子氏による指摘が挙げられる。
田原淳子 (1987) オリンピズムの概念——スポーツ思想の諸概念と比較して。体育原理研究. 18: 16-19.
- 13) Lenk, H. (1979) Social Philosophy of Athletics. Stipes: Champaign. p.194.
- 14) 田原淳子 (1987) 前掲論文.
- 15) 田原淳子 (1987) 同上論文.
- 16) 1972年と1977年の著書の中で、青年社会主義者の言葉として次のようなことに触れている。「トップクラスのスポーツ選手は政治経済システムにおける再生産シンボルという有能な筋肉マシンとしてそのシステムを代表し、メダル製造マシンになるのである」Vgl., Lenk, H. (1972) Leistungssport: Ideologie oder Mythos? Kohlhammer: Stuttgart.

S.27. Lenk, H. (1977) Hundlungsmuster Leistungssport. Karl Hoffman:Schorndorf, S.96.

¹⁷⁾ Lenk, H. (1983) Eigenleistung:Plädoyer für eine positive Leistungskultur. Interfrom: Zürich. S.53.

¹⁸⁾ Lenk, H. (1979) op.cit., p.141.

¹⁹⁾ Lenk, H. (2012) Save Olympic Spirit. Messing, M.・Müller, N. (Eds.) Agon Sportverlag: Kassel. p.104.

レンクはこの部分を次のように記述している。「1960年代には走り高跳びの選手フォスベリーが画期的で優れた跳躍法を編み出した。モントリオールオリンピックでは体操競技の藤本が膝を痛めた状態で決定的な演技を試み、負傷欠場につながる月面宙返りを決めた（そして日本チームは金メダルを獲得した）。これらのことに対して、我々は非人格的、機械的で体系化され操られた筋肉マシンがあらかじめプログラム化され計画された一連の技を完遂しただけだと主張することはできない」。

ここでレンクはオリンピックレベルの競技者のパフォーマンスが機械的に生み出されるものではなく、選手個人における人間としての創造性によるものだと述べる。もちろんそれは日常レベルの人間性ではない。それゆえ、神話的解释対象となるのである。

²⁰⁾ Lenk, H. (1979) op.cit., p.144.

²¹⁾ Lenk, H. (1979) Ibid., p.128.

²²⁾ Lenk, H. (1979) Ibid., p.197.

²³⁾ De Coubertin, P., Diem, C. (Hg.) (1959) op.sit., S.219.

²⁴⁾ Lenk, H. (2012), Messing, M.・Müller, N. (Eds.) op.cit., p.100.

²⁵⁾ 原語は‘terecracy’で、テレビが価値決定権を握るという意味があり、「テレビ支配制」とでも訳せようか。英語の辞書に記載が見られないことからレンクの造語と思われる。例えばソウルオリンピックの100m男子決勝レー

スのタイムスケジュールがテレビ放映に影響された出来事は、テレクラシーの代表例である。ここでの引用は2012年のテキストで、2006年の東京での講演内容が元となっている。ただし、‘terecracy’の表現はすでに1981年の講演原稿において、すでに使用されている。

Lenk, H. (1981) Task of the Philosophy of Sport: Between Publicity and Anthropology. Toward a Philosophic Anthropology of the Achieving Being. Presidential Address-1981. Journal of the Philosophy of Sport (1982). IX. pp.94-106. 参照.

²⁶⁾ Lenk, H. (2012) op.cit., p.102.

²⁷⁾ De Coubertin, P., Diem, C. (Hg.) (1959) op.sit.におけるS.5相当の頁扉に、この言葉は記載されている。

²⁸⁾ たとえば、ホメロスの『イーリアス』に次のような言葉がみられる。「父はわたしをトロイエへ送り出す折に、常に衆に抜きんでて最高の手柄をたてよ、またわが祖先はエピュレならびに広大なリキュエにおいて並びなき勇士と称えられた方々であるから、その家名を辱めてはならぬと、きびしく申し渡した」Ilias VI: 205, ホメロス：松平千秋訳（1992）イリアス。岩波文庫：東京。p.192。「ペレウスはわが子アキレウスに、常に他の者に優る手柄を樹てよといい、アクトルが一子メノイティオスは、そなたにこう諭された」Ilias XI: 294, 松平訳（1992）同上書。p.192.

²⁹⁾ たとえば, Lenk, H. (2012), p.93. 参照.

³⁰⁾ Lenk, H. (2012) op.cit., p.107.

³¹⁾ たとえば, 荒牧は次のように述べている。「有形のレガシーは長期的なレガシーとして有効ではあるものの、オリンピック競技大会の独自のレガシーという視点から考えると不十分であるといわざるをえない。したがって、オリンピック競技大会のレガシーを生み出していくためには、有形のレガシーの原動力とな

るような無形のレガシーを計画する必要があるだろう」。

荒牧亜衣 (2013) オリンピック招致資料から見るオリンピックレガシー. 体育学研究 58-1, pp.1-17. ただし, ここでの論点は招致活動に焦点をあててオリンピックムーブメントにおけるレガシーの構造を明らかにしている。

³²⁾ De Coubertin, P., Diem, C. (Hg.) (1959) op.sit. S.221. 大島訳, p.205.

³³⁾ この解釈は厳密に言えば, 青年男子を「人間の春」として念頭に置いたクーベルタンの解釈に反するが, 現代的な意味への再解釈はオリンピズム自体がこれまで時代に応じて解釈されてきたことに照らして許容されるだろう。

³⁴⁾ Vgl., Lenk, H. (1983) op.cit., S.42-44.

³⁵⁾ たとえば, 平成 25 年度内閣府の「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査報告書」で指摘されている。詳しくは, 内閣府のウェブサイト参照されたい。 http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b2_1.pdf

³⁶⁾ 斎藤正躬 (1964) オリンピック. 岩波新書: 東京. pp.188-189.

(付記: 本稿は 2014 年 11 月 30 日に学習院女子大学にて開催された日本オリンピックアカデミー「東京オリンピック 50 周年記念第 37 回 JOA セッション」において, 「オリンピズムの新たな価値と可能性」と題して行ったクロージングレクチャーの内容をもとに構成されたものである。)